

雨上がりの川

森沢 明夫 作

(159)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(15)

【紫音の話】

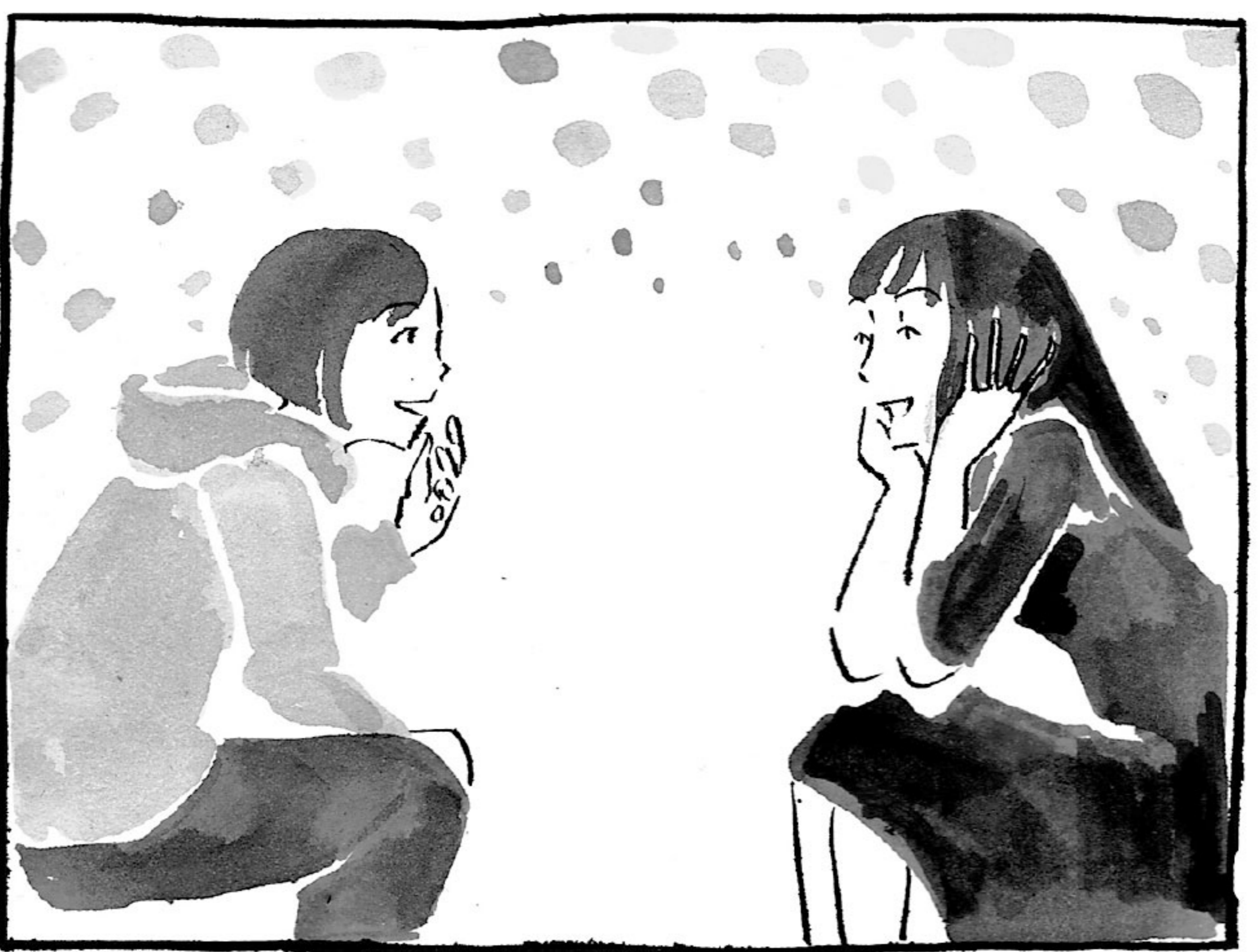
このところ、春香は、ちよくちよくわたしのサロンに顔を出してくれる。予約を取って悩み相談に来るのではなく、わたしの空き時間に合わせて、単純におしゃべりをしに来るのだ。仕事ではないから、お金は取らない。というか、中学生を相手にお金を取ろうなんてはなから思えないし、そもそも、どうでもいいようなおしゃべりを欲しているのは、むしろわたしの方なのだ。

もちろん、会話の内容が悩み相談になることはある。なにしろ春香から見れば、わたしは何でも知っていて、すべての問いかけにズバズバ答えてくれる、いわば特別な能力を備えたメンターなのだから。

でも、わたし個人としては、ごく普通の「友達」としてやべるような気楽さで、春香との時間を愉しませてもらっているのだ。

毎日、毎日、深刻な悩みを抱えた人たちを相手にしている身としては、こういうどうでもいいような会話を平日の昼間からできるのは、とてもありがたいのである。

そして今日もまた、わたしと春香は、まるで毒にも薬



にもならないような戯言を投げ合っては、目と目を合わせてくすくすと笑い、ときには手を叩いて大笑いをして、心をじんわりと癒していくのだった。

シフォンケーキをペロリと食べ終え、アイステイアのグラスも空っぽにして、それから十五分ほどあれこれしゃべっていたとき、ふいに春香が「あつ、そういえば」と両手を膝について背筋を伸ばした。

「ん、どうしたの?」

「あの……、紫音さん、この間、わたしには才能があるって言ってくれましたよね?」

「え? ああ、うん。言ったけど」

「あれ、本当ですよね?」

「あら、わたしが春香ちゃんに嘘をついたこと、ある?」

わたしは冗談めかした顔で春香を睨んでみせた。

「あはは。ないです」

「でしょ?」

じつは先日、わたしは春香にこう言ったのだ。あなたのように、ひどいいじめに合った人はね、ヤスリで削られるみたいに心が痛むけど、でもね、それって、心に付いた悪いものが削り落とされてピカピカに磨かれることでもあるわけ。で、結果として、霊能者としての才能が開花しやすくなるのよ——。